

Program Note

那須田 務 (音楽評論家)

ファビオ・ピオンディとエウローバ・ガランテのバロック音楽には、当時の音楽が持っていた即興性と創造性が息づいている。楽譜にない自由に奏でられる装飾音やパッセージ、微妙なテンポの揺らぎ。そこにイタリア語を思わせる明るい音色と歌の抑揚、ラテン的なパッションと深い情感が加わって、バロック音楽本来の躍動と生命感が鮮やかに立ち現われる。本日はそんな彼らの王道ともいべきイタリア・バロックのプログラムである。

* * * * *

アルカンジェロ・コレツリ 合奏協奏曲 第4番 二長調 Op.6-4

バロックの器楽を語るうえで欠かせないコレツリ(1653～1713)。北イタリアのフジニャーノに生まれ、華やかな芸術が花開いたローマでヴァイオリン音楽の名匠として活躍した。6つの作品集はアルプスを越えて多くの音楽家たちの規範となった。Op.6は作曲家没後の1714年にアムステルダムで刊行された12曲からなる合奏協奏曲集。「二つのヴァイオリンとチェロを小合奏部(コンチェルティーノ)として必須とし、さらに二つのヴァイオリン、ヴィオラ、バス(通奏低音)による大合奏部(コンチェルト・グロツソ)を任意に加える」という長いタイトルを持ち、絶えず奏でている小合奏部と要所で加わる大合奏部によって弱奏と強奏のダイナミックな対比と掛け合いが生まれる。本日演奏されるOp.6の4は緩急緩急の4楽章構成で「教会コンチェルト」のタイプに属している。第1楽章はアダージョの導入部の後にアレグロの主部が続く。第2楽章短調アダージョは弦楽合奏による和声のうつろいが美しい。第3楽章ヴィヴァーチェは3拍子の舞曲風。第4楽章はジグ風のアレグロ。二つのヴァイオリンの掛け合いに力強い大合奏部が加わって情熱的に盛り上がる。

フランチェスコ・ジェミニアーニ

合奏協奏曲 第12番 ニ短調 Op.5－12「ラ・フォリア」

トスカーナのルツカに生まれたジェミニアーニ(1687～1762)は、若い頃にローマでコレツリに師事し、その音楽をロンドンに伝えた。合奏協奏曲 Op.5の12「ラ・フォリア」は、コレツリのヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ Op.5の12を合奏協奏曲に編曲したものだが、小合奏部はトリオではなく、ヴィオラを加えた4人。「フォリア」はもともとイペリア半島を起源とする、歌やギターなどとともに踊られる情熱的な舞曲で、イタリア語のFolliaには狂気や熱狂などの意味がある。特定の低音と和声進行の上で旋律が次々と変奏されていく。

ピエトロ・アントニオ・ロカテッリ

6つの劇場風序曲と6つの協奏曲 Op.4から第1、4番

ロカテッリ(1695～1764)はベルガモに生まれ、1711年に16歳でローマに赴き、コレツリから多大な影響を受けると同時に、ヴィヴァルディらの音楽の技巧的・劇的な表現を押し広げた。本日演奏される2曲は、1735年にアムステルダムで出版された《6つの劇場風序曲と6つの協奏曲》Op. 4のうちの序曲に含まれる。ちなみにタイトルの「劇場風序曲Introduttioni」だが、オペラのそれではなく、華やかな幕開けや明暗の対比、緊張と解放など劇音楽風の性格を示す。ジェミニアーニの「ラ・フォリア」と同様、小合奏部は4つの楽器であることと3つの楽章からなる。第1番の第1楽章ニ長調では二つの合奏体によるトゥツティと小合奏部のみが交互に奏でる。第2楽章ハ長調もアレグロ、二つの合奏が弱音で同じ動きをする。第3楽章ニ長調は3拍子の舞曲風のプレスト。第4番第1楽章アレグロはト長調に始まり転調して半終止で終わる。第2楽章はアンダンテ、ふたつの合奏が終始弱音で美しい旋律を奏で、カデンツァを経て3拍子のプレスト ト長調の第3楽章で曲を閉じる。

アントニオ・ヴィヴァルディ ヴァイオリンのための独奏協奏曲集 「和声と創意の試み」Op.8より《四季》

プログラムの後半はヴィヴァルディ(1678～1741年)の《四季》。1725年にアムステルダムで刊行された、12曲からなる独奏協奏曲集 Op.8の最初の4曲にあたる。巻頭にはヴィヴァルディ自身の作とされるソネット(イタリア語の14行詩)が掲げられ、4曲の協奏曲の各楽章に対応している。その上、楽譜のソネットの各フレーズに対応する箇所には「鳥のさえずり」「犬の吠え声」「雷鳴」「酔った人々」などの言葉が書き込まれていて、あたかも器楽による演劇のように、様々な情景や出来事が次々と現れる。各曲はいずれも急緩急の3楽章構成。両端楽章は総奏とソロが交互に演奏され、ソロの部分で転調が行われるリトルネッロ形式、第2楽章はオペラのアリアのような緩徐楽章。

第1番「春」ホ長調。第1楽章では鳥たちが喜ばしい歌で春の到来を祝い、春の野にそよ風が吹き、雷鳴が響く。やがて嵐が過ぎ去ると、再び鳥の歌が戻ってくる。第2楽章嬰ハ短調では、牧人が忠実な犬をかたわらに眠り、第3楽章では牧人たちがバグパイプの音に合わせて踊る。第2番「夏」ト短調。第1楽章では焼けつくような暑さに人も羊もぐったり。カッコウやキジバトが鳴き、そよ風が吹く。そこに突然北風が吹き始め、牧人は嵐を予感して不安になる。第2楽章嬰ハ短調。雷鳴と稲妻に恐れ、蝇やぶよの群れに悩まされて眠れない。第3楽章では恐れが現実になり、雷鳴が轟き、雹が降ってせつかく実った穀物を打ち砕く。第3番「秋」ヘ長調。第1楽章では収穫を終えた農民たちが酒を飲み、歌い、踊って喜びを分かち合う。第2楽章二短調。酒宴に疲れて人々は眠りにつき、穏やかな静けさが訪れる。第3楽章で狩人たちは角笛を鳴らして猟に出かけ、獲物を追い、最後に獲物が力尽きる。第4番「冬」ヘ短調。第1楽章では凍てつく寒さに震えて歯がガタガタ鳴り、足踏みしながら耐える。第2楽章変ホ長調。暖炉のそばで過ごす穏やかな時間。外では雨が降っているが、暖かな室内には安らぎがある。第3楽章は一転して戸外の風景。人々は氷の上を転ばないようにそろそろと進み、空の上では南風と北風が争う。これが冬、でもこれもまた楽しいよ。